

# 台湾における「眷村」から改築した国民住宅についての考察と提案

## 新北市忠孝新村を通して

### A Proposal and Study of Military Housing in Taiwan Through the New Taipei City Zhongxiao New Village

11723011

傅 廣琳

主査 篠原 聡子

教授

副査 平田 京子

教授

葉袋 奈美子 教授

本研究は、台湾の歴史、住宅政策などの背景からみる、台湾の国民住宅の中に眷村から建て替えた形態における居住状態に注目し、現在直面している問題を明らかにすることを目的とし、台北首都圏の新北市に所在している「忠孝新村」を研究対象にアンケートと現地調査を行った。忠孝新村初期の入居者は元眷村民と一般国民で二つの住棟に分かれていたことで、最初から居住者の年齢構成が違って、さらに時間を経過し、家族構成、近隣交流、ニーズの変化と住居者の入れ替わりなどにより、居住者の高齢化、世帯のつながり希薄化、共有スペースや設備の不足などの問題が見られる。住環境の見直しと問題の解決には、地域との連携や、家族以外居住者とのつながりを持つことなどが必要と考えられる。ここでは、忠孝新村を地域の一つの核として位置づけ、ソフト面の居住者の自治運営の仕組みも含め、忠孝新村の足元の地上2階から地下2階までの空間をリノベーションする。中に店舗、シェアハウス、交流のための広場、共有スペースを計画し、柔らかいエッジを持つまちに開く国民住宅社区を設計提案する。

**Keywords:** New Taipei City, Public housing, Military dependent villages, Neighborhood interaction, Renovation, Public space

台湾新北市, 眷村, 国民住宅, 近所付き合い, 改修計画, 共有空間

## 1. はじめに

### 1-1 研究の背景と目的

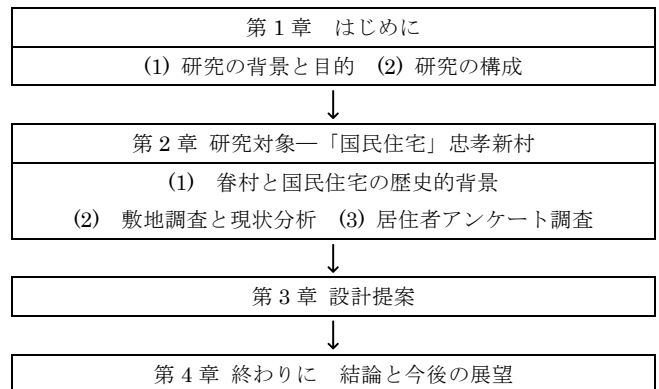
台湾には、「眷村」という特有な住居形態がある。「眷村」とは、第二次世界大戦後、中国における内戦時代に台湾に駐屯した国民政府の軍隊の兵士とその家族が生活した村の総称である。

時間の経過と共に、元々仮設住宅であった眷村と呼ばれる集合住宅の建設が老朽化や住戸不足などの問題に直面し、政府が主導する都市開発の一環となる国民住宅の建設事業と連携し、全面的に国民住宅に建替え、または移住することになった。眷村国民住宅眷村は一戸建の住宅の集合から成る接地性が高い村の形だったが、国民住宅は高密度集住形態の高層集合住宅である。近隣との関係は単純な水平方向から複雑な垂直方向になり、コミュニティのあり方は変化した。さらに2018年現在、このように眷村から移住した人々の住む国民住宅では、設備や建物の老朽化、共有空間不足、居住者の高齢化の進行などにつれ、当時の住戸プランと生活合わなくなってきた。居住環境の見直しが求められている。

本研究では、台北首都圏の新北市に所在している国民住宅「忠孝新村」を研究対象とし、元眷民が眷村で生活していた経験と現在の住まいに対する意識を調査し、近隣関係と居住環境の改善に着目した改修計画をする。本研究が台湾に数多く存在する元眷民の住む国民住宅を改修する際の指針となることを目的とする。

### 1-2 研究の構成

本研究は4章で構成されている。



(図1) 研究の構成

序論となる第1章では研究の背景と目的、論文の構成について述べる。

本論は、第2章第3章からなる。

第2章では研究対象である忠孝新村の成り立ちを明らかにするため、台湾の眷村と国民住宅の歴史的背景を調査し、さらに現在の居住者にアンケートの調査と現地考察を行い、分析する。

第3章では調査結果を元に設計提案を行う。

第4章を結論とし、本研究のまとめと今後の展望を述べる。

1-3 用語の定義

本研究において「社区」とは、台湾における日本の団地のようなコミュニティを指す言葉であり、一つの市町村として政府に管理される場合が多く、社区内居住者の自治も行っている。「眷民」は、眷村の居住者—中国内戦で撤退してきた軍人とその家族を指す。

2. 研究対象—「国民住宅」忠孝新村

2-1 歴史的背景

2-1-1 眷村の形成

1) 背景

1949年第二次大戦後、国民政府が台湾に撤退し、国民政府が台北を臨時首都に定めた以降、国民政府と一緒に撤退してきた軍人や難民が流入してきた。最初は経済困難のため、住宅を建てることができず、日本植民時代に残された軍寮、空き家などを利用した。そのあとから少しずつ軍人家族のための住宅がたてられ、1956年になってからは正式的に眷村を建てる計画が確立された。軍人とその家族の1/6の人(約10万人)が眷村に居住していた。早期の眷村は石、木、泥などとても簡易な臨時住宅として台湾各地に建設され、統一された基準がなく、ユニットの広さ大体は4~9坪であった。元々は仮設住宅のつもりであったが(いつか大陸に戻ることを予想していた)、時間を経て人口が段々と増加していき、政府が眷村に対する増設と修繕の経費を増やさなければならない状況になった。2001年台湾内政部の統計資料により、眷村は台湾全国で530ヶ所にあった。

2) 眷村の土地と経費の利用

- ①民有地を借りるのと、公共土地(軍用地や政府用地など)を使う。敷地の条件はそれぞれ違うため眷村の大きさもばらつきがある。
  - ②経費は主に政府の予算やアメリカからの援助や国内外の民間支援金などから出す。軍人が自己負担の眷村の少数あるが、多くのは政府が建設し、部分補助を提供する。
- 制度に関しては、内戦によってできた眷村では、食糧を配給する制度(米、小麦粉、塩、オイルなど)や眷補證(眷民の身分証明證)を使うことで福利厚生を受けられる。住民は所有権を持たず、政府が「住民証」を発行し、眷村の住戸の売買は禁止されていた。

(表1) 1956年~眷村の発展と変化

[第一段階]	[第二段階]	[第三段階]	[第四段階]
公用土地で各自建設	公用土地で政府から建設	各自建設、私有化	建て替え、私有化
~1956	1957~1966	1967~1978	1979~1990
既存の住宅を利用するや簡易な家を軍人自ら建てる			
軍隊各総部各地建設			
民間組織が募金を行い建設		民間組織の募金で建替え事業をサポート	
		政府から低利子ローンを提供	国民住宅に建替え

(出典：羅於陵(1991). Ch"uan-ts'(military dependent villages): definition and redefinition of the spatial meaning (筆者訳))

(表2) 眷村に対する法律条文

年代	項目	目的と内容
1956年	眷村住宅籌建運動	眷村住宅建設計画のはじめ
1978年	國軍老舊眷村重建試辦期間作業要點	軍隊を世話し、国家の経済社会建設に協力し、眷村住民の生活環境を改善し、軍人とその家族が家を購入するのを助け、安全保障と戦時動員の必要性を考慮する政府の好意を元に実行する。
1996年	國軍老舊眷村改建條例	老朽化した眷村の更新を加速させ、土地利用の経済的効率を上げ、住宅を建設し、元の眷村世帯と中低所得世帯を世話し、地方政府が公共施設用地を取得するのを協力する。そして都市の景観を改善する。

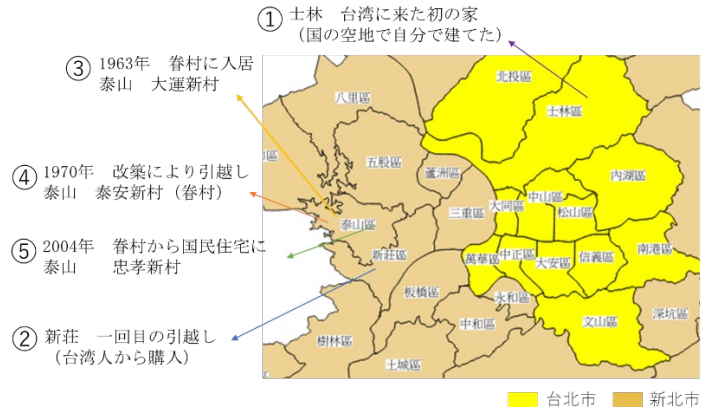
(出典：成貴華(2015). Study on Military Community Culture Preservation and Development (筆者訳))

3) 入居条件、システム

志願役(募兵制)の兵士が入居できる。(軍官、士官以上のランクが対象)ランク、所属(陸軍、海軍、空軍)、部隊で分類し、眷村を分配する。

4) インタビューにより眷村の実態

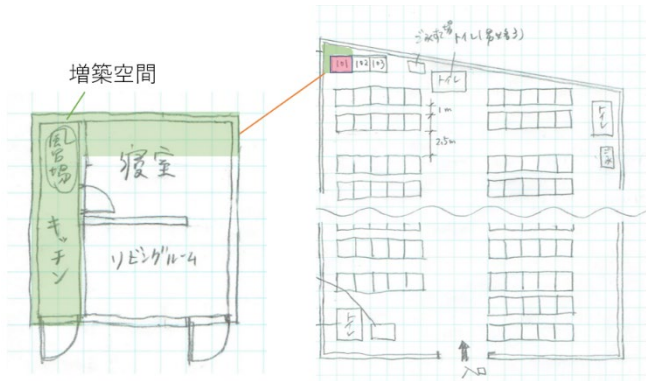
- ・当時現役軍人の第二世代—1955年生まれ(63歳)士官の7人家族の長男 Lさん



(図2) Lさんの眷村経歴

a. 最初の眷村—大運新村 1967-1970

- ・住所：新北市泰山區大運新村
- ・入居対象は運輸部隊なので大運と命名
- ・半分の敷地が一号高速道路の予定通過路線に入るため、1970年に半分壊し、2004年に全村廃止、国民住宅に移動。
- ・全村103戸
- ・風呂場がなく、トイレは共有でゴミ捨て場と併設し3つにある。
- ・住戸ユニットは7坪(約23㎡)
- ・空き地に増築自由



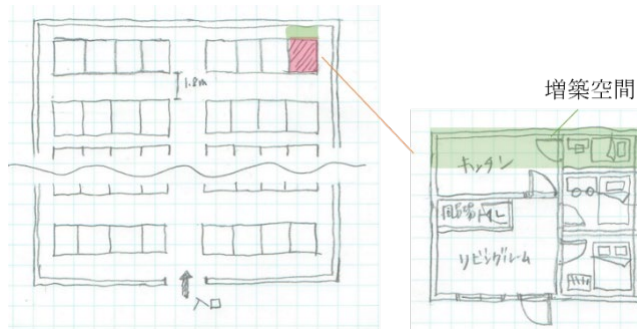
(図3) 大運新村の配置と間取



(図4) 大運新村当時の写真

b. 二つ目の眷村—泰安新村 1970—2004

- ・住所：新北市泰山区仁愛路40号
- ・インフラ整備より半分削られた大運新村45戸の住民のために建てられた眷村。
- ・2004年に廃止され、国民住宅に改築。
- ・住民が元々予定の11坪に不満、国防部に抗争した結果、13坪建ての面積の住戸が建てられた。
- ・全村45戸
- ・室内13坪(約43㎡)
- ・各住戸に専有風呂場、トイレ付き。
- ・後期にほぼ全住戸が2階まで増築された。



(図5) 泰安新村の配置と間取



(図6) 泰安新村当時の写真

c. 国民住宅—忠孝新村國宅社區 2004~

- ・元々住んでいた眷村の相場にのっとり追加料金が発生する。  
(追加料金なしか100万円プラス)
- ・元眷村の住民が未入居の住戸を188万円で安く購入できる
- ・ここで眷村の居住証を返却し、家の所有権を取得
- ・14階建て、室内28坪、3LDK(2トイレ、3ベランダ)

2-1-2 国民住宅

台湾の公共住宅政策は日本の植民時期から始まり、「日本植民時代→戦後→今」という変革点を経過し、様々な住居形態が形成してきた。

1) 国民住宅の沿革

1949年国民政府が台北を臨時首都に定めた以降人口が流入し、各地に眷村や戦後の混乱期に違建住宅が建てられていったという状態に直面し、「国民住宅計画」を立案した。

1950年 陳誠が行政院長を務めていた時に始まる。

1953年 陳誠は住宅建設の推進計画を策定する目的で、行政院の下に技術小組を設立した。

1954年 アメリカの援助があり、支援顧問も戦後の住宅計画に参画し、アメリカの設計概念や手法を導入。

1975年 「国民住宅条例」が制定され、政府が直接建設に関わるようになり、各地に国民住宅が建設されている。

2) 国民住宅発展三つの時期

1950~1963「示範國宅」

- ・戦後の社会整頓
- ・住宅不足の問題を解決
- ・1955アメリカ援助による住宅の知識が導入

1964~1974「標準國宅」

- ・経済発展が好調
- ・見栄えや衛生面の考慮で違法建物を排除
- ・法条を公表、住宅環境を管理、整頓。

1975~1988「準則國宅」

- ・不動産相場が高すぎる状況
- ・相場による住宅の問題を解決
- ・政府自ら国宅を建て、より安い価格で住宅を提供する
- ・眷村からの建替えが多数

3) 台北における準則國宅時期で眷村から建替えた国民住宅事例

(表3) 各国民住宅の概要

	築年	敷地面積㎡	建築面積	建築階数	戸数	部屋タイプ
湖光国宅	1981	75800 ㎡	26822.73 ㎡	地下1階、 地上5、7、 12階	1948戸 (眷976)	20坪、24坪、26坪、 28坪、30坪、34坪
壽園国宅	1982	9265.83 ㎡	3902.51 ㎡	地下1階、 地上5、7、 10、14階	403戸 (眷181)	20坪、24坪、26坪、 30坪、34坪
龍華国宅	1982	13792 ㎡	3450 ㎡	地下1階、 地上7階	469戸 (眷220)	20坪、24坪、26坪、 28坪、30坪、34坪
仁鄰国宅	1983	2444 ㎡	1150.32 ㎡	地下1階、 地上7階	91戸 (眷46)	16坪、20坪、24坪、 26坪、30坪、34坪
嘉禾国宅	1983	2992 ㎡	1367 ㎡	地下1階、 地上10階	160戸 (眷78)	24坪、26坪、30坪、 34坪
克難国宅	1985	3951 ㎡	2382.67 ㎡	地下2階、 地上7階	154戸 (眷66)	20坪、24坪、26坪、 28坪、30坪、34坪
自立国宅	1986	1868.18 ㎡	1045.95 ㎡	地下1階、 地上7階	75戸 (眷35)	20坪、24坪、26坪、 28坪、30坪、34坪

この時期の国民住宅の多数は眷村の建替事業と連結し、眷村から

移住する居住者は全住戸のおよそ半数くらい占めている。

## 2-2 敷地調査と現状分析

### 2-2-1 研究対象の選定—国民住宅—新北市忠孝新村

#### 1) 新北市忠孝新村的概要

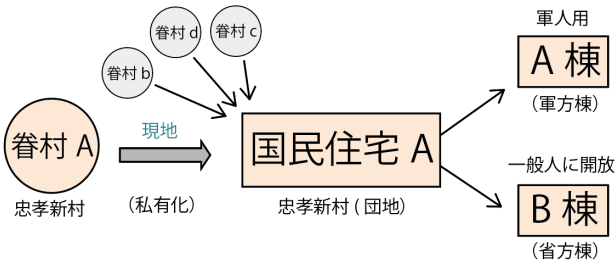
- ・住所：新北市泰山郷黎明段 777, 778, 786-1、803、804
- ・敷地面積：4312.23 m<sup>2</sup>      ・階数：地上14階 / 地下2階
- ・建築面積：2415.97 m<sup>2</sup>      ・延べ面積：6911.02 m<sup>2</sup>
- ・総戸数：166戸              ・完成日：2001.6.21
- ・部屋タイプ：3LDK、4LDK、5LDK



(図7) 現状写真

忠孝新村的所在地の新北市は、首都である台北市の衛星都市である。元々は台湾省の県である台北県であり、2010年に直轄市に昇格し、新北市と改称された。首都の台北市の通勤圏でありながら、都市の開発と発展は進行中である。

#### 2) 忠孝新村的仕組み



(図8) 忠孝新村的仕組み図

忠孝新村は元々眷村の用地の現地で建替えた国民住宅であり、忠孝新村的居住者だけではなく、他の眷村から移住して来た眷民もいる。そして二つの住棟を眷村住民に分配する「軍方棟」と一般国民に分譲販売する「省方棟」に分かれる。

### 2-2-2 敷地調査



(図9) 敷地周辺模型

周辺の建物は一番高くも7階で2,3,4階建てがメインとなってい

る地域の中、14階がある忠孝新村は目印となる建物である。

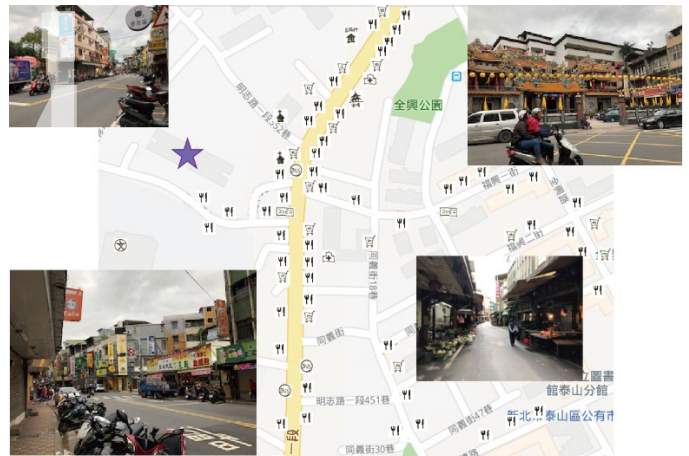


(図10) 敷地周辺地図

敷地の真正面辭修路を越えて向こう側は国立の高校「泰山高中」のキャンパスがあり、辭修路の奥に行くと大きな公園「辭修公園」がある。大通りに出たすぐ賑やかな商店街「明志路一段」がある。20分の徒歩圏内に七つの公立の学校がある。

### 2-2-3 忠孝新村的周辺環境と共有空間

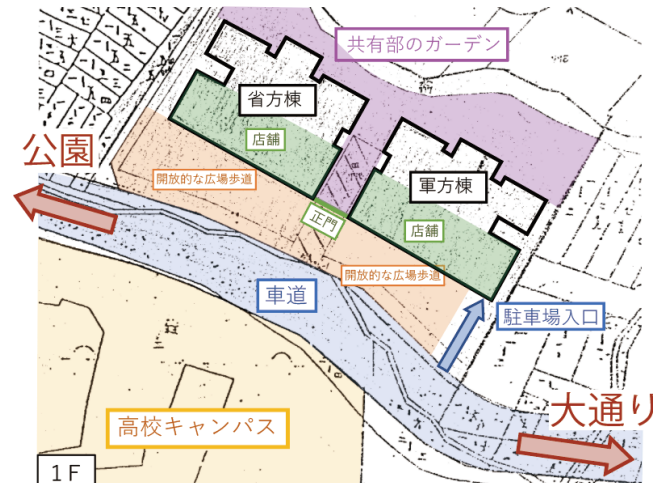
#### 1) 忠孝新村的周辺環境



(図10) 敷地周辺機能

商店街の明志路一段では飲食店、売店などがとても多くて、食材を売っている朝の市場も徒歩10分以内のところにある。外食、自炊生活が両方ともでき、生活機能はとても便利なところである。交通面はMRT(台湾の電車の名称)の最寄り駅は徒歩50分ほど距離があるが、バス亭は近くにある。また、車生活も多く見られている。

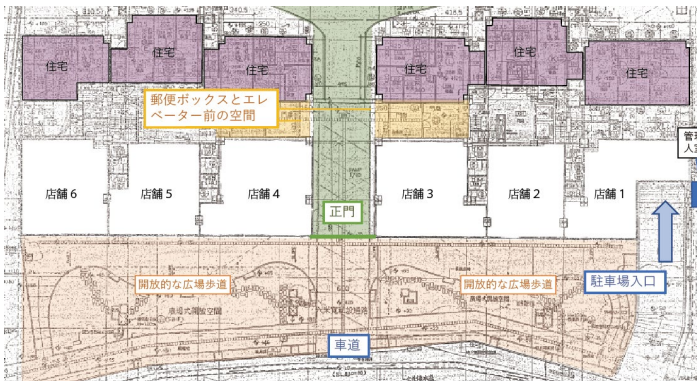
#### 2) 忠孝新村的共有空間



(図11) 敷地図

一階の手前の表側は店舗に計画され、建物の足下の手前は豊かな緑を持つ歩道で、後ろに奥庭のような空き地がある。

・1階店舗



(図12) 一階店舗平面図

①幼稚園と安親班（親の仕事終わるまで放課後の幼稚園児や小学生を預かる施設）この二つの子育て関連の店しか現在営業していない。

②半数以上が閉店状態。

・手前の歩道

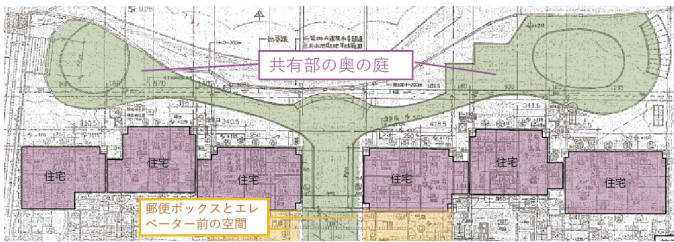


(図13) 歩道写真

①緑の範囲が広すぎて、通行しづらい。

②よりまちのみんなに開放し、広場に。

・後ろの庭



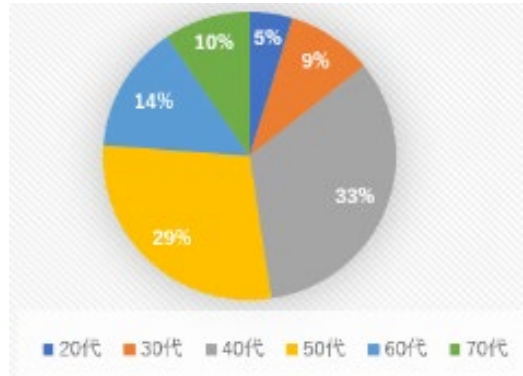
(図14) 後ろの庭の写真と図面

①一階の住居者の私の空間との切り分けが不明確。プライベート性も低い。

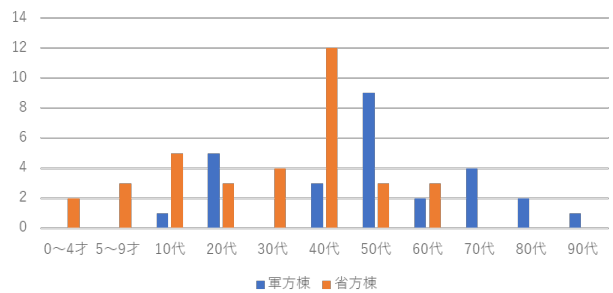
②周辺の塀が隣接している隣の住宅と距離が近い。

2-3 居住者アンケート調査

回答状況：22枚（軍方棟：11・省方棟：11）

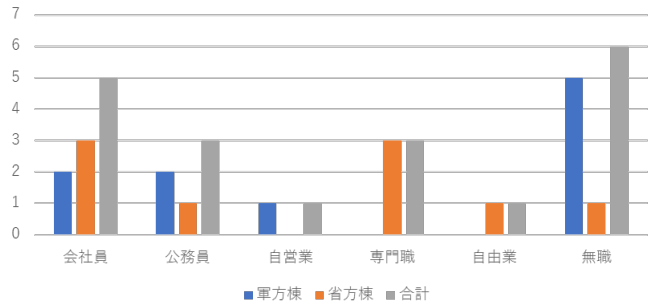


(図15) 回答者年齢比(n=22)



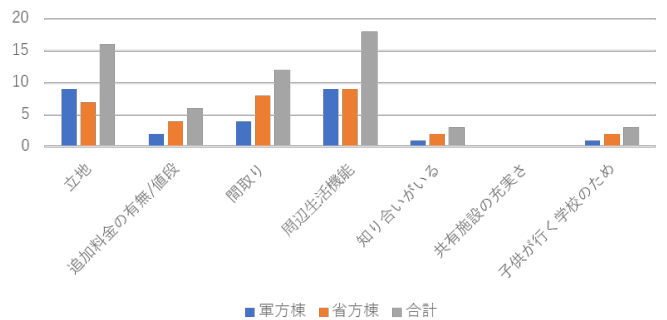
(図15) 回答者とその家族の年齢(n=22)

回答者の家族の年齢層は軍方棟が高く、省方棟が低い。



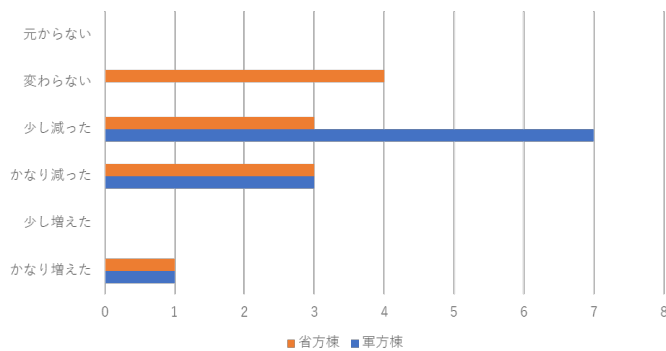
(図16) 回答者世帯主職業(n=22)

軍方棟がリタイアして無職の居住者が多い

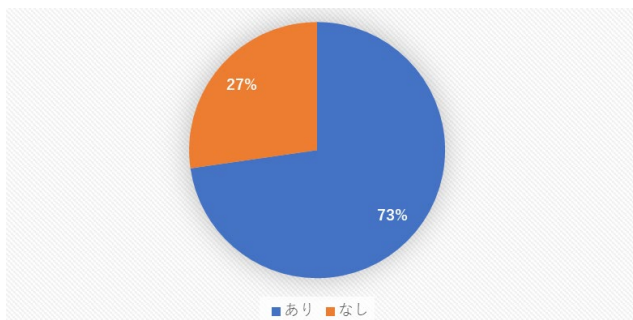


(図17) 忠孝新村を選んだ決め手前1~3位(n=22)

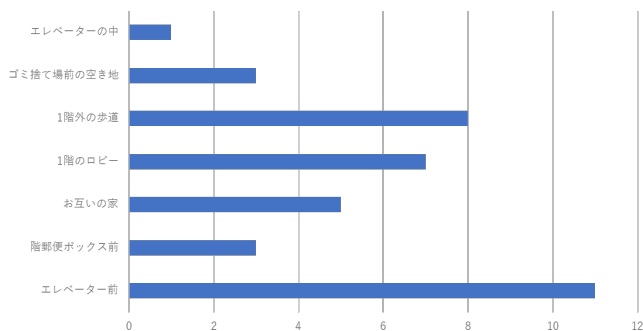
忠孝新村を選んだ決め手の前3順位は「周辺生活機能」、「立地」、「間取」



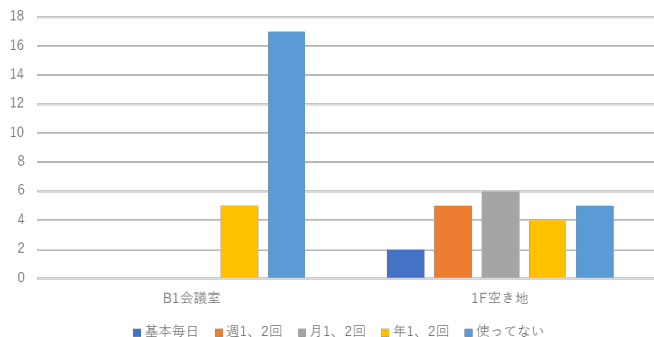
(図18) 以前お住まいで隣人交流の程度は今との変化 (n=22)  
軍方棟の住民はほぼ「交流が減った」という意見が見られている。



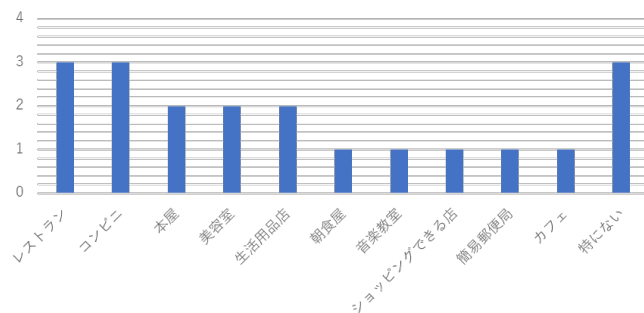
(図19) 近所付き合いを増やす意向 (n=22)  
居住者は近所付き合いを増やしたい意向が強いと思われる。



(図20) 友たちと交流する場所 (n=22)  
お互いの家に行く以外は、基本は長くいられる場所がなく、一時的な場所である。



(図21) 共有空間の利用状況 (n=22)  
共有スペースの利用が少ないが、もっと豊かな機能が求められていることがわかる。



(図22) 1Fにあって欲しい店 (n=22)  
外食率が高く、レストラン、コンビニ、カフェ、朝食屋、など生活が便利になるお店が欲しいという声が多く見られる。特に街の人々が入ってくることに抵抗感がないようである。

(表4) 敷地内にあって欲しい場所 (n=22)

敷地内にあって欲しい場所		敷地外にあって欲しい場所	
ジム	2	交流する場	2
日差しを遮るあずまや	1	ボードゲームができる場所	1
使える屋上	1	スポーツ器具	1
子供の遊び場	1	カラオケ	1
前庭園	1	ちゃんとした警備室	1
子育て施設	1	散歩できる場	1
プール	1	老人の活動、運動する場	2
座り心地がいい椅子	1	売店	1
閲覧室	1	面会室	1

あって欲しい場所は、運動と交流できる場がメインになっている。

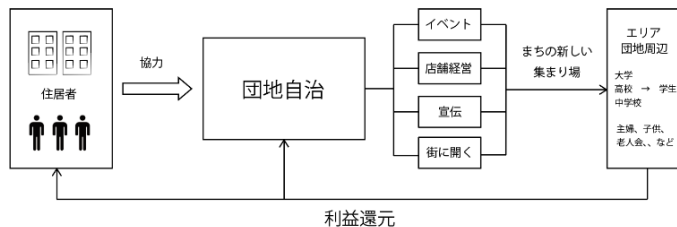
### 3. 設計提案

#### 3-1 現在の問題点

- 1) 単純な垂直方向の動線である接地性が高い1階建ての村のような形から、接地性が低い14層の高層住宅で、動線が複雑な垂直方向になった。
- 2) 眷村の既存コミュニティが解体し、共有空間の不足もあり、交流が少なくなっている。
- 3) 築18年でまだ古いとは言えない築年数であるが、眷村の移住者が半分占めているため高齢化している。間取が3LDK~4LDKをメインとしたファミリー向けのプランであるが、上記の理由により独身や二人暮らしの高齢者の居住者が多くいる。

#### 3-2 コンセプト・プログラム

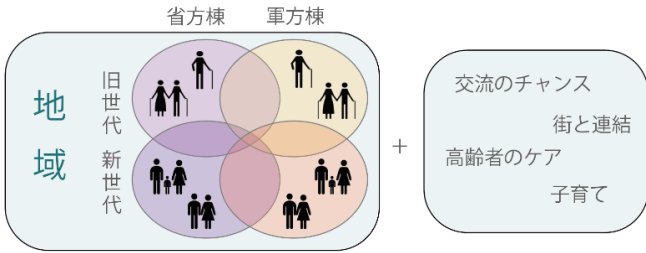
- 1) ソフト面の強化—居住者自治で社区運営の向上



(図23) 居住者自治の仕組み図

居住者たちの自治による、シェアハウス、店舗、イベントなどの運営を行い、より良い住環境を作り出す。この繰り返しを行い、好循環になっていくと期待する。

- 2) ハード面で建物足下の空間を改修することで再生する
- 高齢者のためのシェアハウス
  - まちに開く広場（一階か地下まで）
  - 多様な店舗
  - 交流を深める共有スペース
  - 学生と単身者のシェアハウス
  - 安親班と幼稚園と繋がって、地下まで垂直の室外遊び場。
  - 室外シアターなどイベント開催できる空間
  - 〔拒絶〕壁のような高い木々と歩道で街との繋がりを切断している現状→〔誘引〕視線が通る、人を招く地下城下町のような明るく賑やかな空間



(図 24) 設計ダイアグラム

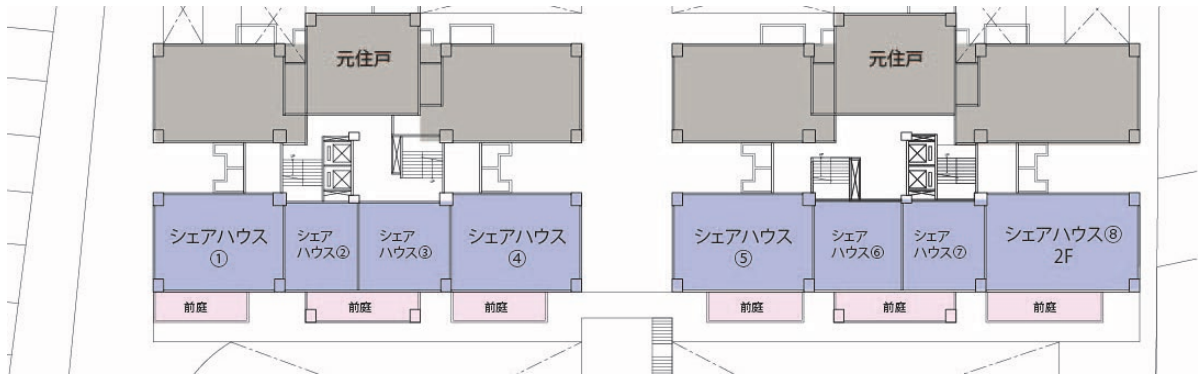
### 3-4 配置計画と図面



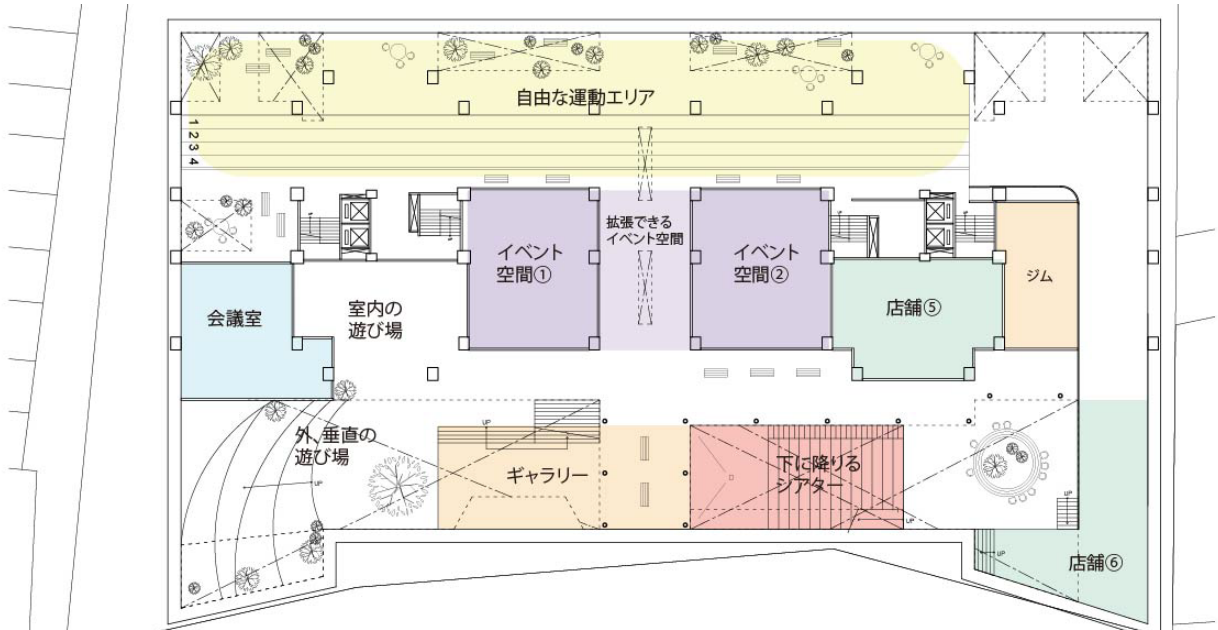
(図 26) 1F 平面図 S=1/400

### 3-3 設計手法

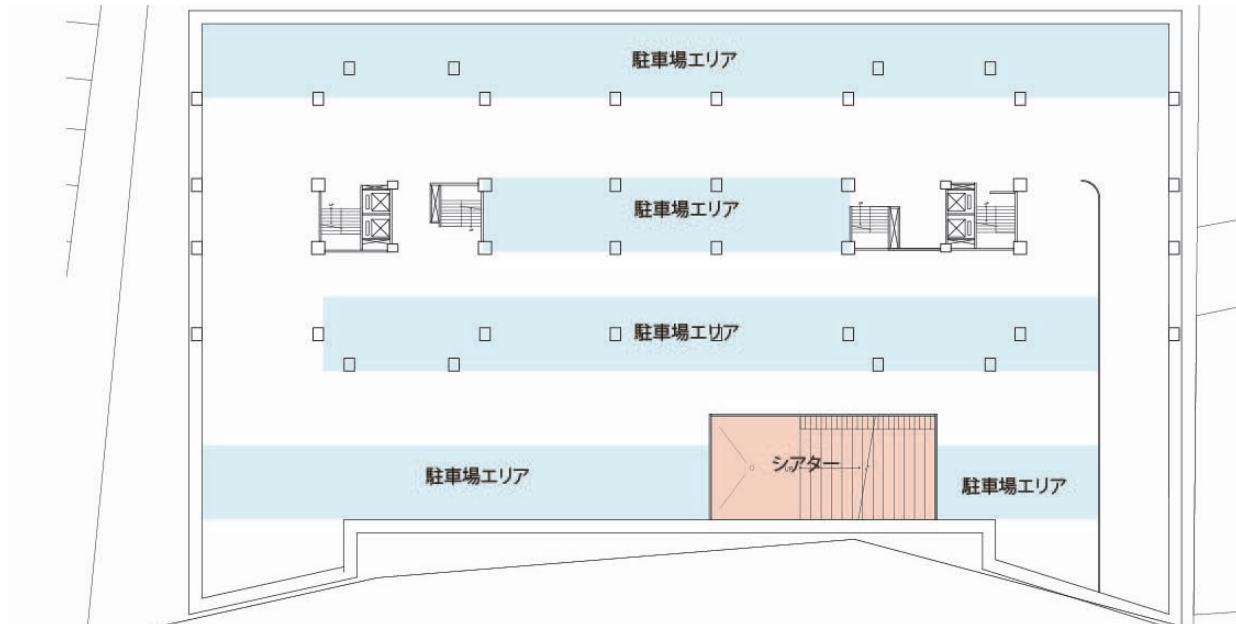
- 高層で接地性が低い現状があるが、1階と開いた地下の作りで上層階の居住者も人々の動きを見て、外出の意向を増えることを期待する。
- 壁のような高い木々と歩道で街との繋がりを切断するのを避け、後ろの庭を開けて柔らかいエッジを作ることで街の人々を呼ぶ。
- 暗くて、年中湿気が多い生気がない地下駐車場を開き、明るく、風通しがよい暖かく場所、地下の城下町のような賑やかな空間にする。
- 学校が多い地域で、台北市に通勤する会社員が多い新北市であり、学生や独身社会人向けのシェアハウスを設け、お互いの生活を協力しあう。新しい住み方を国民住宅に導入し、より多種多様な交流や生活実態を生み出すことを期待する。
- 社区居民の自治で、運営の収益を住居者に還元し、より充実した機能を持つ共有空間と多彩なイベントが開催できるように目指す。
- 高齢者ケアを含め、接地性の高い一階に独身高齢者のシェアハウスを作る。奥庭に庭づくりで各自ユニットの個性を染み出す。そして居住者だけではなく、外部からの高齢者も受け入れる。



(図 27) 2F 平面図 S=1/500



(図 28) B1F 平面図 S=1/500



(図 29) B2F 平面図 S=1/500

参考文献

- ② 成貴華 (2015). Study on Military Community Culture Preservation and Development2)
- ② 羅於陵 (1991). Ch"uan-ts' (military dependent villages): definition and redefinition of the spatial meaning